



莊子繪鈔
元

□ 13
1898
1



1898
卷 1

千里

究



南華真經
三十編

莊子繪鈔

三編

全部
四冊

皇都書肆

雲箋堂
梓行
有斐堂

像真仙茂萼南



菊丘五匪野文坡謹畫之

全子會坡

卷之六

秀門貴兮一識一迷
 悟畢面目本來真惟
 心而惟一嘆萬事還
 然莊蝶夢覺來滿苑
 百花香

近衛准三宮賜白鶴筆江臥仙書



莊子繪抄全篇

目次

卷の元

大意

内篇逍遥遊第一

卷の亨

内篇齊物論第二

内篇養生主第三

内篇人間世第四

内篇德充符第五

莊子繪抄 卷の元目次

二非二 卷之九

一 内篇太宗師第六

一 内篇應帝王第七

一 外篇駢拇第八

一 卷の利

一 外篇馬蹄第九

一 外篇胠篋第十

一 外篇在宥第十一

一 外篇天地第十二

一 外篇天道第十三

一 外篇天運第十四

一 外篇刻意第十五

一 外篇繕性第十六

一 外篇秋水第十七

一 外篇至樂第十八

一 外篇達生第十九

一 卷の貞

一 外篇山木第二十

一 外篇田子方第二十一

一 外篇知北遊第二十二

一 雜篇庚桑楚第二十三

庄子會抄

卷之九目次

二

目錄終

- 一 雜篇徐無鬼第二十四
- 一 雜篇則陽第二十五
- 一 雜篇外物第二十六
- 一 雜篇寓言第二十七
- 一 雜篇讓王第二十八
- 一 雜篇盜跖第二十九
- 一 雜篇說劍第三十
- 一 雜篇漁父第三十一
- 一 雜篇列御寇第三十二
- 一 雜篇天下篇第三十三

目錄終

莊子繪抄卷の元

皇京 菊丘臥山人江匡弼文坡拙解



大意

莊子名氏周といひ字を子休といふ。睢陽の蒙縣といふ所にて生きたる人なり。莊子の在世は周武王より三十五代の顯王とす。帝の御代にて本朝にて人王第六代孝安天皇に御宇に當り。此莊子の時代を戰國の代と稱す。戰國の代は周の三十二代威烈王よりとす。帝の治世三十三年に周の代は順ふ所の諸侯等周の代に王法乃衰徴する。各于戈を振ひ合戰を爲して互ふ周の帝位を奪ひ四海を掌握せんとす。其諸侯等宋の悼公魏の文公韓の景公

士子會 録

卷之九 目次

二

趙の列公。燕の僖公。楚の悼類。秦の惠公。鄭の康公。晋の孝公等
 なる。此亂るふ始つて。二百八十三年。間を戰國の代と稱ど。本朝ふて。
 人王第五代。孝昭天皇。即位第七十三年。より。同く第七代。孝靈天皇。
 七十年。庚辰の歳。までの間。孝靈天皇。七十年。庚辰年に。秦乃
 始皇帝。彼諸候等の子孫を悉く。打滅して。天下一統。秦の代と
 あり。なる。是ふ於て。周の代。三十八世。ふて。斷絶せり。此。莊子の。戰國の
 代とありて。凡七十餘年に。當り。頃ふ。出くる人。ふて。周の。顯王。三十二三
 年の頃。小楚の。威王。といふ。諸候。より。莊子が。賢人。ある事。以。聞きて。
 聘礼を。厚く。志て。國の。宰相。小爲んと。使。以て。召ま。されども。犧牛。乃
 喻と。説て。辞退せり。事。此。書。雜篇。第十八。讓王篇。小見。へり。彼

七篇の。教道。を説き。孟子。同時代の人。あり。莊子の。戰
 國。騷亂の。世。小生れ。遇ひ。此。亂世。を。餘所。小見。て。先。以。韜。跡。を。晦し。
 山林。小隱。遁。去て。は。く。世の中。人。を。觀ふ。神仙の。靈。教。小晦。清
 淨。無爲。眞一の。旨。以。大悟。せ。専。世間。法。小執。着。して。仁。義。禮
 樂。以。詐。了。設け。輕薄。を。以て。人。小交。り。眞實。質。素。淳樸。の本。心
 を。失ふ。以。憤。諸人。を。志。て。本。來。清淨。眞一の。故郷。を。識。めんと。自
 著。述。を。所。の。書。以。世。小號。て。莊子。といふ。扱。此。書。の。莊子。自。分。て。是
 以。三篇。と。爲し。始。以。内。篇。と。大。綱。を。稱。して。其。篇。の中。小。於て。逍。遙
 遊。齊。物。論。養。生。主。人。間。世。德。充。符。太。宗。師。應。帝。王。と。七。の。小。目
 以。區別。して。扱。その。次。を。外。篇。と。大。綱。を。稱。し。其。篇。の中。小。駢。拇。馬

蹄胙筮在宥。天地天道。天運刻意。繕性秋水。至樂達生。山木田
 子方。知北遊。与小目。以十五小區別。次之雜篇。與大綱。を稱どる
 中。に。康桑楚。徐無鬼。則陽。外物。寓言。讓王。盜跖。說劍。漁父。列
 御寇。天下。と。小目。以十一小區別。ら。都合して。三十三篇なり。扱右の
 内篇の中。に。七篇。ふ。諸人の身内の本心の沙汰を。辨説せり。外篇の
 十五篇。ふ。既小身と本心。を立て。後外物。小交接の常。道を。彼是
 の物。小借喻て。辨説せり。扱又。雜篇。に。彼内篇と外篇との餘。を。説
 きて。右最初の内篇の第一。逍遙遊の篇。ふ。逍遙逸樂とく。
 人。この真一を。悟ま。二箇の真心。千變万化。小奪。の。こと。順境。小も。逆
 境。小入。ても。自由自在。に。て。我。以。失。れ。ど。應用無礙。小。道。を。遙。ぶ。と。以。

説。扱。を。道。遙。ぶ。事。を。自由。自在。に。遂。げ。事。の。物。論。小。拘。り。て。得。ら。ま
 する。故。小。齊。物。論。を。次。小。説。ま。り。扱。この。是。非。の。物。論。を。放。下。じ。と。欲。ま。す
 も。人々の。主人。公。を。能。養。い。ま。さ。ば。益。多。く。事。を。説。く。は。養生。主。と。名。け。け
 る。あり。主人。公。と。人々の。真心。を。い。ふ。あり。此。真心。を。又。真。君。と。も。真。一。と。も。
 大道。と。も。稱。ど。て。此。莊子の。篇。毎。小。説。く。あり。此。真。一。を。本。體。と。して。
 儒教。佛。道。を。借。り。君。臣。父。子。夫。婦。の。道。直。に。て。神。代。り。今。の。世。を。て
 も。泰。平。安。寧。小。治。ま。り。と。日本。の。大道。を。い。ふ。唯。真。一。の。神。道。あり。と
 て。略。して。唯。一。の。神。道。と。稱。ど。神。道。と。い。神。國。の。大道。と。い。の。略。あり。必。と
 唯。授。一人。の。兩。部。習。合。小。非。ど。唯。一。向。の。神。道。と。い。唯。一。あり。と。誤。る。べ。く。と。
 右の。真。一。と。い。佛。道。ふ。て。一切。如。來。妙。圓。覺。の。心。と。も。菩。提。心。と。も。佛。性。と。も。

佛心も。彌一禪家ふての本來の面目も無位の真人も。主人公も號け。其餘の諸宗にて種々小名号を呼ぶも皆この真一の事あり。故小此人々の真一心を能養ふ事。専一と云ふなり。扱この真一主人公を能養ふての後。人間世小交際の要道とて人界小交つて浮世を渉るの道と説示さんとして人間世と題して此事を説く。さて人間世小交ふ事を得るの信。素理の天地同一體なる故。小符節。合と云ふが如く。徳を充符を説く。徳を得たり。徳の得たり。本然の二理。自己の胸中小平生増と減さ。右ち得て充滿ふ。徳充と云ふなり。其徳が萬境合一。小契ふ自己。小本然の大道。真一といふ者。具足。どんな有へん。事と。示さんとして太宗師の篇。孤説。太宗師といふ。真一の事。ふて是

を道といふ。其太宗師。真一と仰ぐ所を人々具足。一箇々圓成と。是孤大悟得る底。西海の帝王。萬國を坐。小靜謐。小治め給ふが如く。萬物の主宰と云ふ事。孤説。さて孤應帝王と號せり。其餘の外篇。雜篇の題号。其篇毎ふて悉く説へん。後略と。凡内篇。外篇。雜篇ともに。莊子。自然。天然と。神仙。清淨の大道。小通達。一。本然。真一の靈。旨。小契ふて。其世の人の妄想。煩惱。小奪ひきて。自己の真一の本性を迷晦と云ふ。孤悲。憐。世人を迷惑の教と。世人の世教。小迷はる。依て神通自在。孤得ざる事。孤憤。う。此篇。孤説。示して。其迷ひの雲霧を吹散して。自己。真一。清淨の明月。孤觀察。と。誕。小して。出。其

言激くして走る水の岩小せりくく如く其見識の及ぶ所筆力の至る所千變万化小書散したる不似ることも高く眼力と着て見よ是の莊子一篇の説黄面の瞿曇四十九年の説と朝三暮四五千四十余卷の藏經と三十三篇の莊子と朝四暮三をり然も是の如くありと雖も劔去て久し

莊子傳列仙全傳卷の二史記卷の六十三列傳第三小も載り又この莊子を南華真經と世小稱する事事物紀原卷の二小云莊子の號唐の會要小曰唐天寶元年二月十二日莊子追贈して南華真人と同三月十九日に李林甫天子奏して此書を南華真經と號と是より莊子一篇を南華

真經といふあり

莊子の一篇其旨神仙清淨真一の靈要以説示と故古今乃大儒碩儒及び高僧知識といふも其本意を能解と事能を解する事能いざる非と能其本意に達と事能と故小多の注解を觀察小猶靴を隔て瘡を搔小似たり況や巨細已事未と明めど無眼ありて如何ぞ此一篇を和解と事得べけんや然つと雖も世の童蒙の夢小ども莊子の老婆心と識ざる者の多き看る不堪と漫小此和解せんと秃筆を捻起し其大略を二述小國字以て加ふる小其圖畫を以てと謂べ風を浪を起すと賊後の弓何の用と爲し予に三十棒を許し幸甚幸甚

莊子繪鈔卷の元

内篇逍遥遊第一

内篇と一箇の心内を説示と云故ふ名と云次々の篇も皆其意
から逍遥遊と此篇以號けり逍遥とい樂之遊と訓して人々
にあり所の真心が世界の境界千小變つ方に化せども其小も奪り
ど又一切の煩ある事逆なる事小も奪りれど万事の爲小繫を縛
る事なく其事々小應じて礙と滞り事なく一心神變自在小歡び
樂び依り彼詩經小樂只君子といひ論語小脰を曲てると云云
と樂亦其中に在るといふ樂と此逍遥遊の語の異れども意の一致也
此莊子の書内篇外篇雜篇都合三十三篇の最初小於て樂

ひの字以て首卷と云々莊子の胸中のいふ小とや悟知るべし

逍遥遊の篇

北冥小北の海魚わつ鯢と其名依り其鯢といふ魚の大き其幾千里
からそと依知る程の大魚が忽ち化して變つて鳥と爲つたり其
鳥の名以鵬と號く此と鵬といふ鳥の大も幾千里ある事以計
り知るべし程の大鳥なる此大鳥忽ち怒じて飛とて其羽翼
の大さ垂天の雲といつて天の垂下るが如く又上天より四方一
い小繩下る雲の若く天小充地を覆ふが如き羽翼を張る是の大鳥
北海震動し運とて將小南冥小南冥の飛徒ひと欲ふなり齊諧と
いふ書の怪異と云云志し述る書あるが其齊諧の書小曰鵬大鵬の南

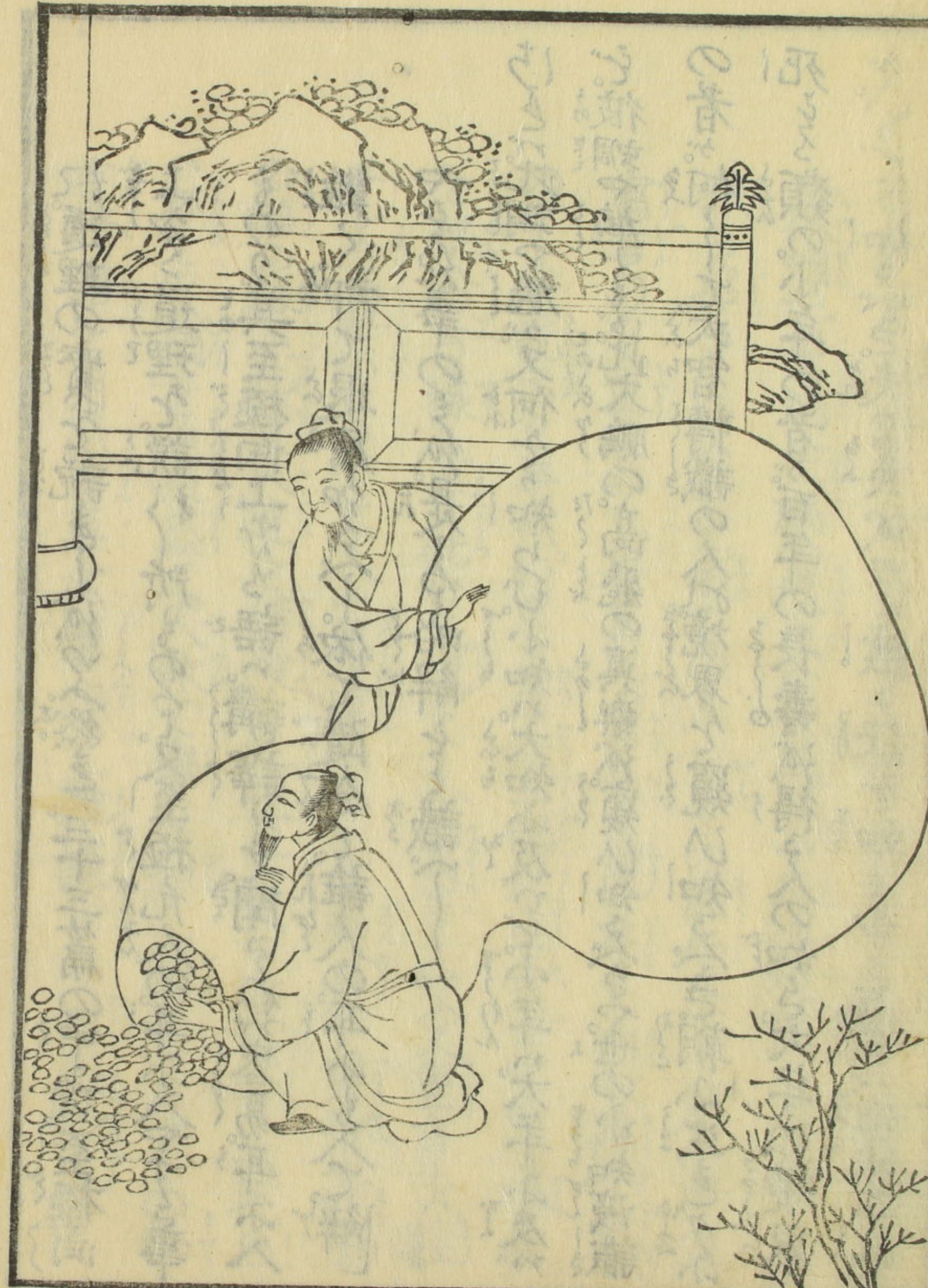
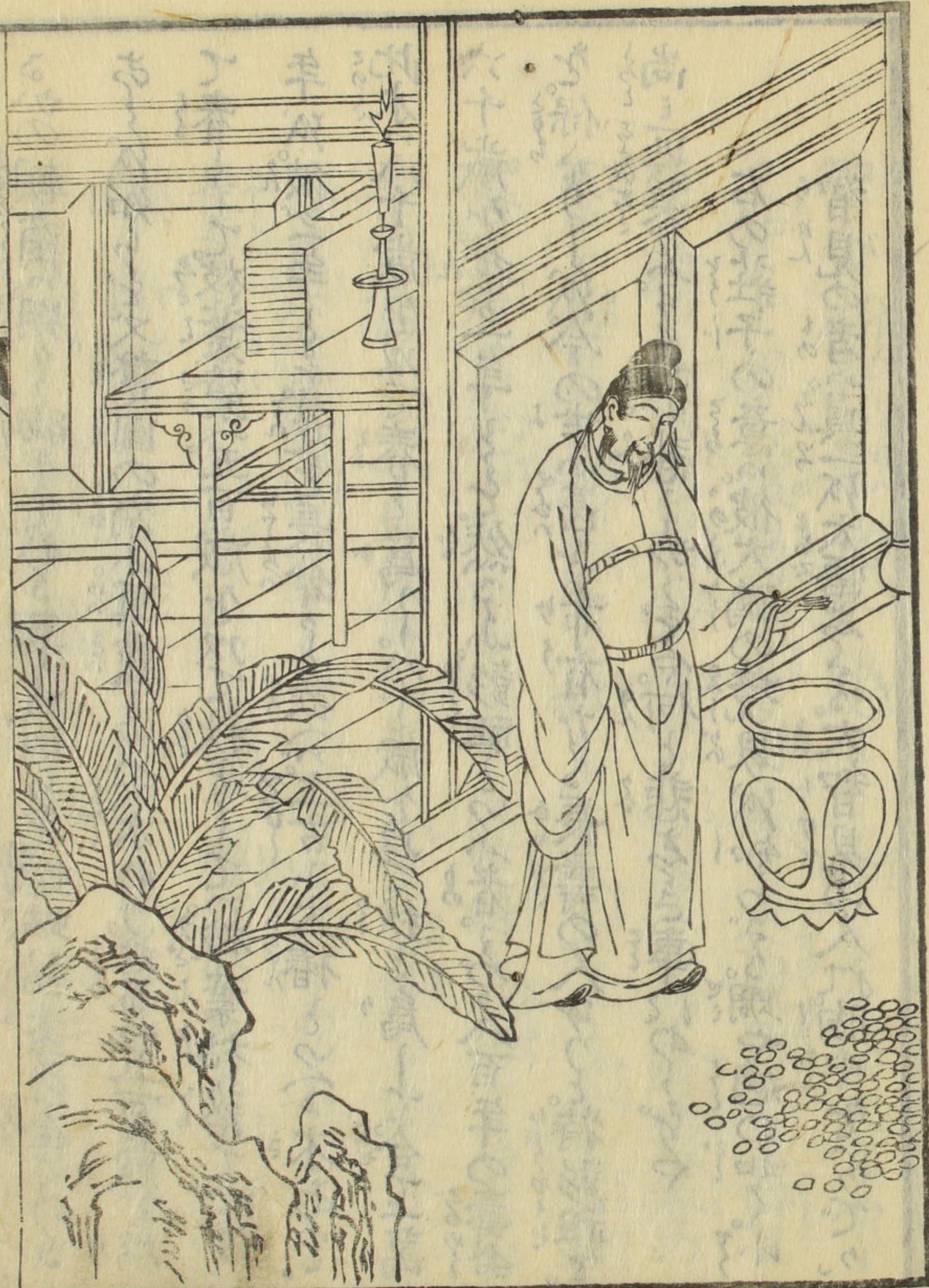
冥小飛徒めいせうとらとて其羽翼そのよくひて海水うみづを撃動うづとて。三千里さんせんりとてと羽撃よくし。三千里の長遠ちやうえんき海上うみ二面に震動ふるし。直ただ小扶搖せうふたうとて高く吹ふ上行う行ゆ。大風おほいぜう小搏せうはく乘まて虚空こくうへ飛と上あること。九万里くわんりにして去ゆて六月りくがつを以もて休息きゅうしと。時とき小嫫せうせうと鸞鳩らんこうとが。此事このことを聞きて笑わらふて曰い我等われら決起けつぎ小翼せうよくを張は飛とぶ。わの掬くやこちこれ枋木ぼうぼく小飛せうと捨すじとて小飛せうと至いたらば去ゆて地ち小控せうこうひ落おちて。羸苦れいこじでゐたり。然しかれ小わの大鵬たいほうとらんが。北海ほくかいとて遙とほ々と數千里すせんり飛と來きる。又また九万里くわんりも蒼天そうてんへ飛と上ある。且また小はる際さいも知しる。南海なんかいへ飛と去ゆじと欲ほくと實事じつじでゐる。皆みな虚話きよわであらうと機はりを笑わらふ。此この北海ほくかいの鯢いとて大魚たいぎよ大鵬たいほうとて鳥とり小化せうかて。水みづ小擊せうげきとて三千里さんせんり扶た搖う小搏せうはくて上あること九万里くわんり去ゆて六月りくがつを以もて息いきふとて是こゝ莊子せうし乃なり

胸中けうちゆう廣大くわんたいの樂がくとて瓜うり形容けいよう説せひが爲なる。此この譬喻へいよを設たふして世よ小せうかた。鯢魚いぎよや大鵬たいほうとて鳥とり以もて寓言えいげんし。彼かの神仙せんせんの教けうの真ま一いつの玄旨げんしを。大悟たいご徹底ていてつしたる大人おとなの胸中けうちゆうに活撥かつぱく自在じざい小して万物ばんぶつ小轉せうてんせり。まごど萬境まんきやう小礙せうがいらまごど應機おうき接物せつぶつ千變せんぺん万化ばんかし。妙應めうおう無方むほうの氣きに乗のりて天地てんちの外がわ小逍遙せうせうやうし。廣大くわんたい無量むりやうの真樂まがくを爲なと底ていを暫しばらくく大鵬たいほうが扶搖ふたうの大風おほいぜう小羽撃せうよくして神變しんぺん自在じざい小。九万里くわんりの蒼天そうてんへ上ある。直ただ小南なん海かいへ徙うつじと爲なる。如ごとく譬喻へいよらまごど其その嫫せうや小鳩せうこうが是こゝを聞きて笑わらふて掬く枋木ぼうぼく小せう人にん飛と捨す得とる。まごど神仙せんせん真ま一いつの玄旨げんしを。悟得ごとくぬ凡夫ぼんぷもご自己おのれ見知けんち淺陋せんろう小して器量きりやう狭小せうせう比ひべて。彼かの真ま一いつを大悟たいご徹底ていてつしたる人ひとの廣大くわんたい無量むりやうの見識けんしを以もて神變しんぺん

自在なる真樂を爲と瓜却て種々小計の推量嘲と譏の
 彼蜩や鸞鳩大鵬の境界瓜自己が小身の境界小比て嘲と
 譏と如きこと事と示との○凡この莊子三十三篇の中小の
 寓言あり重言あり危言あり寓言とい寓寄と訓と莊子我胸
 の中より説示と事瓜わざと齧缺王倪庚桑楚などる様事
 を他人の云る様小寄託けて説と瓜寓言とい又重言とい莊
 子が自説示と事を人小尊重トせん神農や黄帝や孔子
 の語の様小此聖人達を借設けて説れ瓜又危言とい瓜危
 い杯を酒を危に盛て人飲で樂じ如く莊子よりくの狂
 言綺語を用ひ万事瓜譬比べて雜談とる如く戲言の中

に道理の實を説と瓜然と三十三篇の中小へ至極向
 上なる道理を説け所もあつ又至極九人の耳小やす事
 もわり其至極向上なる語の講譯して聞さん容易耳小入
 難く却て退屈多るべ依て隨分と誰人の耳小も入て解
 やと事のも瓜是る略解と識べ

はと此蜩や鳩又何を知らじ小知大知小及んど小年大年小及
 んど彼蜩や鳩も此大鵬の高飛の真樂瓜窺ひ知るべきや世の小知淺識
 の者が何して大智博識の人其境界を窺ひ知るべき朝小生と夕小
 死とる類の小年の者が百年の長壽瓜得る人の如く大年の境界
 をいつてり知るべき夫の奚瓜以て然る訣を知とる瓜譬瓜濕地小生



木の朝菌の朔を晦まである事、瓜知られど、蟪蛄の四季の全くの
 おもひ知られど、又楚國の南に真靈といふ大木あり。此木の五百歳を以
 て春として、枝葉榮へ五百歳を以て秋として、枝葉枯落て、一十
 年、瓜、彼が二年とて、是を長命と欲へ、上古に大椿といふ木あり。
 此木の八千歳を以て春と爲し、八千歳を以て秋と爲し、合せて一萬
 六千歳を、彼が二年とて、然るふ、彭祖といふ者、八百年の壽命
 を保り、今、今、の世、甚と希有なる長壽の人多りと、特、彭祖と
 尚と匹慕ふとい、亦悲しむとや、何と悲と事、にわらむとや
 右の莊子の意、彼大鵬の境界、瓜知られど、蜩や鳩の如く、小
 智見の者に、具一瓜大悟する。大智見の人、胸中をいりて、

知るべき、譬、小年、大年、に及びざるが如く、それ瓜、又、瓜、
 て、知るべき、瓜、彼、濕地、小生、朝菌、と、菌、朝日、
 晦、瓜、の、事、瓜、知、是、生、て、間、か、枯、ゆ、く、又、蟪蛄、春、の
 末、瓜、甚、ま、或、瓜、甚、ま、秋、ま、て、生、て、い、ひ、全、く、春、秋、
 四季、を、知、れ、ど、此、小、年、か、る、も、や、に、暫、時、を、一、生、と、爲、と、小
 年の者、あ、ま、一、千、年、瓜、以、て、一、年、と、爲、と、真、靈、と、い、ふ、木、も、あ、る、
 又一萬六千歳を以て、一、年、と、爲、と、大、椿、と、い、ふ、木、も、あ、る、此、こ、と、
 長壽の者、世、あ、る、事、瓜、知、ら、ぬ、輩、纒、小、八、百、年、の、壽、命、瓜、
 保、る、彭、祖、の、事、の、瓜、知、て、又、も、世、小、か、れ、長、壽、の、人、か、何、と、ぞ
 あ、ま、小、似、こ、と、匹、慕、ふ、誠、小、智、見、お、り、て、彼、真、靈、大、椿、の、

事以知らぬこと此莊子の悲しむ事なり是世の小智見なり
 人を見て此譬以設けて小智見の者をして大智見なり
 めんと莊子の老波安心なり誠小世の人々の如く武士にて兵法
 剣術誠小我に勝る者なりと諸士以見下し自慢の鼻の僧正坊
 太郎坊達もわくわくし自負の口を開て天下の達人達を吞却と
 るが如くも武者修行ふ出て世界小我を勝る者あり事を知
 らぬ中の朝菌の暫時以て一生とし足つと欲ふが如く其門弟や
 或は此人の以て知る者の彭祖の壽命を匹慕ふが如く又僧波門
 の如きも三藏小達し釋迦二代の説經を暗誦しつと自慢の鼻
 をいじり或は禪坊主の如き少くも見識あり以て知識店を

開張の盲衆盲引て四方の雲水僧蠅や蚊の如く集る高
 座より閻魔の亡者を視下とが如く两眼をひきせ僧も俗も
 一口小罵り喝つと我の佛菩薩小も超歴代の祖師小も越勝
 つる顔をし誠小見と所臨濟惠照禪師が再び世小出て
 衆生を接得せしむ様もさうも口以開て説所いあつても
 談義僧の波々を教化する小似たり此會下に在る僧俗
 等の彼彭祖が八百歳以匹慕ふの輩なり亦悲しむるを
 や儒者も小も又是あり然もとも今の儒者小も只學才
 を自負し詩文章に長たなる以自慢す其の是等々を
 孔子顔子孟子かどの聖意を盡しむる事餘所は

て只の所謂太儒碩儒通儒と稱する輩小似て其意
 小人儒あり君子儒といふ者小てい曾てか。是て先生顔
 を大張て諸生を教導すと。自負と。是又他の意。彼
 彭祖の八百歳小して彼大椿の一萬六千歳を二年と爲と
 如き孔子顔子孟子の事。以知らざる。故あり。爰又この
 僧小も儒者小も神者武士小も勝を起する。朝菌蟪蛄の
 輩ありて彼彭祖も知らぬ。元より冥靈も大椿の大壽あり
 事も一向小知らぬ者あり。夫何者。と。いふ。別の者。いふ。
 凡人あり。此凡人の中に農家あり。工匠の類あり。職人の類
 あり。商家あり。此中小商家に多く。彼朝菌蟪蛄の輩多

く此輩の纔に三百兩五百兩或千兩内外の黄金以所持
 たる。以て高位の人も武士も儒者も出家も醫者も學者
 も賢徳ある人も。其小視下して塵芥の如く。我小位もあけ
 ば徳もかく。學文もあけ。文盲短才の如く。知る。然る。何
 ゆ。此の如き。と。觀。ま。只の纔所持する。金銀を自負する。以
 てあり。是亦悲し。世の廣き。五千兩。一萬五萬。拾萬。千萬
 兩の金銀を所持する。猶満足とせざる。人あり。事。以知ら
 事。亦悲し。此商家の金銀を所持する。輩。買者。以
 見て。屠者。非人の差別なく。頭を低。兩手をつ。て。尊重し。
 高貴の人。武士。儒者。沙門。醫者。學者。道德ある人の。廉服。貧

家傳の藥方以他人不齋として制止たす事かかれしつて遂小此妙
 藥の秘方以彼旅客に與へり。旅客こそを得て以て呉王夫差
 の御前小参て曰某人の手の不龜の藥方ありて何なる雪中大
 寒の時ふても此藥以兩手に塗附るとして胼胝いありり兩手に暖
 氣生して手の龜とす事かしと辨舌を以て説けり呉王こそ乃
 者を直小召抱置れり。其後江水以隔る。越とす國も。越王勾踐
 寒中小水戰小馴る軍兵を卒し。呉の國小發向して合戦と時
 に呉王彼手の不龜藥方以知つる者を召出きて是を大將と爲
 し。大軍以引率て越國の敵軍を追拂と命じたまふ彼者もて期
 ちつる事か多し。辞とる色か。即時小遣兵數千以引率し。彼大江

の邊小陣し多。越國の軍中へ息もつぐと切てゆ。越の大軍是
 を見て其餘とて追取込る。以專と戦ひし。呉國の諸軍大將
 の下知はりて彼手の龜ぬ妙藥を手に取て足手に塗るとり附
 て雪も氷も厭とて。越軍の中へ方無窮小切て巡る。越軍の謀大
 に相違し。散々小打負て越國とて敗北と呉國の諸軍勝利
 を得て。歎歌を唱て飯國と。呉王大感悦ありて彼手の龜ぬ妙
 藥以て越軍以退ける。廢美とて我領國の土地を裂分て彼
 に與へ諸候小とちまひける。是手の龜ぬ藥以て或は諸候大名
 とありて。大國を領し或は是を以て統を併濟て。纒の小金以得て
 世を渡す。是を用る所異かあり。今子惠子と五石も盛る。翫わ

何ぞ是は弘以て大樽大樽と俗小の酒と盛樽小ありて海河を渡るとも舟をこもふ。江湖を渡る器に大なる瓢を舟の左右につけておる小用ゆるを大樽とよふ用ゆる事の不調法とよりのあり其瓢瓢落として底淺く長さのほて物を容る所の事の弘憂ひ難義ふありて又夫子惠子との所の大樹のあつが諸人の殿の猶逢き心のわりとつりけをば又惠子が白吾が所の小大樹のあつが諸人のをは孤の樽の木と名をげけぬ。樽の和名イヌカラ椿小似て臭き木小て其大木の擁腫と腫物にうこの盛とささ如く節目瘰癧がら盤曲つと木匠の繩墨にも中ど其又小枝も卷曲て規矩小中らととつへ板の樽の大木弘切て塗の邊小と置に匠者大工箱細工師の等が顧も眄もせど行みり。莊子子言の天のとて用ひ様のから事。此樽の大木と同く依て衆人の同く捨去て用ひぬ

からととつへ莊子が白子の惠子の方の獨狸狂とつりのの弘見とる。狸狂とつりと註釈して或は猫多しのひ狐ののぬぬのと註すとも皆ありと是は鼠弘ととんとてかりなりありには只狐狸の類と見て可なりん次の衆の鼠を執つとつり別ちて見らんと鼠按を以て爰を解を是として誠とす此狸狂ともか自己の身の小く輕きまに身を昇たつと弘述すの是は多くにおるをふして叢中に隱を伏て其友狐友狸の敖遊ふ其所來る者弘候とて彼友と共小東西小跳梁行つとるとわらて高き所下き所弘避となりと遊び我を忘と樂とて是を以て至極と爲せとも遂ふ獵者の機辟小中に或は細罟ふからとて死とる弘見とる今夫殺豚牛とつり獸の其大と垂天の雲の若くふして誠小天を二面小覆ひ塞げる雲を仰ぎ見らん如く高大なる獸なとも鼠を執ゆ事能せぬなり此の獸廣大の器量を具とる故小猫や鼯鼠かの如く小枝小拘りて小知見弘是とし彼小人が

大土子會史

卷之六

十一

利禄を貪うと上小諂ひ。君小阿。威勢を以て自慢し。遂に讒せられ。或ひは仕落わりて身死す。小至るは彼狸狴の機辟小わらして網死す。如く此聚牛の如く大獸の鼠を以て捕ゆる。小枝藝かけも深山に在て獵人の害とる事。狐すぬぐも安樂なる。何と大活計ありや。今子惠子とて。天樹の樗を以て。其用事なれば。益多し。大木ありと患がら。何と其樗の大木。以て無何有の郷。廣莫の野。小樹て彷徨乎と浮遊。遊びて其側小無爲ふ。逍遥子と歡び樂きて。其下に寢臥する。尤や致と。かへば拙人推夫が爲ふ。行芥て天と。何物も害とる者ありん然と。用ひらるる所ありとも。安じど困苦とありや。

右惠子。五石の大瓠。手の龜。藥及び呉越の合戦。又樗の

大木の事。莊子の寓言にて。世小無き事。狐作して有様小説と。なる。其大意。世の小智見の者。万事取扱ふ事。瑣少小とて。大用。狐さをも。又大智見の。人。万事取扱ふ事。大機大用と。自と。廣大か。小狐大と。鳥。芥子。小富士山を容る。手段あり。然る。小世智賢く。只小智。以て。人間小交。短才を以て。智者。屈ひ。臂。張者。彼大人を見て。愚なりと。其廣大の器量。の事を窺ひ得。却て耻ぢり笑ふ者あり。是みる。真一の玄音。大悟せざる。無眼子。か。ありと。互に惠子。問と。莊子が。答を。世の人。謎を。け。様。説て。大機大用の玄音。示と者あり。無何有の郷。と。廣莫の野。と。

廣曠莫大者。是眞一の玄旨。よて造化自然至道の中。小樂へと地と
 指て。小莊子の旨を大悟せば。逍遙自在。よて。廣大無量。歡
 樂。得む。予が略解。九牛。之毛。ふも。及び。く。と。知る。べき。あり

廣曠莫大者。造化自然至道の中。小樂へと地と。指て。小莊子の旨を大悟せば。逍遙自在。よて。廣大無量。歡樂。得む。予が略解。九牛。之毛。ふも。及び。く。と。知る。べき。あり。

